

●関西学院大学 文学研究科総合心理学専攻

「国際化社会に貢献する心理学実践家の養成」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

英語を母語とする特任助教による英語力強化プログラムについて、参加を希望する大学院生のスケジュール調整が困難であった。

また、初年度に採用した特任助教が急遽帰国したが、その後任に適切な人物を見つけることは出来なかった。

苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

大学院生はそれぞれの専門によって授業の履修形態はさまざまであった。英語強化プログラムは正規のカリキュラムとしては組み込まなかったため、時間割の空いている時間が揃わなかったのが原因であった。

助教の帰国は東日本大震災に伴う原発事故発生後、自身と家族の安全を確保したいと言う要望であったため、強く慰留することも出来なかった。また、残りの任期が短いことと、同じく安全上の理由により後任の適任者を見つけることが出来なかった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

スケジュール調整は困難であったが、複数回のクラスを開講し、授業のない時間帯にも割り振ることにより、より多くの大学院生が受講できるよう努力した。

最終年度は国内で専門業者を厳選し、英語での口頭での意思疎通や学会などでのプレゼンテーションに関して同様の指導を委託することで、積極的に英語で情報発信する能力を向上させることができた。